

訓練生のうちそと

I 高訓（K府）の例

K府には2地区に高訓がある。

訪問先のP高訓では、45年から高卒対象の金型科を新設した。設置理由は金型が多能工的要素を必要とするためと、中卒者が得にくくなったことから、業界の強い要望によるものである。現在金型科は機械から回った中卒の2年課程6名と新規の高卒者7名が混成訓練を行なっている。

また、電工科は電子機器から分科して、今年から発足したが、高卒者が16名いるため、うち、12名を転職科に回し、残り4名と中卒3名で混成訓練を行なっている。

また自動車科に高卒で入ったものは転職に回っているので現在この科は中卒で占められている。

なお高訓2地区の学歴別の応募者と入校者の年次別推移は下表の通りで、前年度までは高卒者が中卒者の約 $\frac{1}{3}$ を占めた。

本年度は応募者が少なかったため、入校者は前年より73名減となったが、高卒者は3名減にすぎず、42年度より、ほぼ横ばい状態を続けている。この数からみて、高卒訓練の今後が注目される。

年 度		42	43	44	45
定 員			295	265	305
応 募 者 数			284	409	245
入 校 者 数			232	230	154
修了者数			121	185	
学 歴	中 卒		177	180	107
	高 卒		55	50	47
年 令	15~16		145	141	
	17~24		74	78	

II 進路指導について

全国的に高校進学熱が高まっているが、私の訪ねたO県とK府は中でも有数の進学県であることは、それぞれ84%、84.8%で、全国平均76.7%より伺い知れる。

進学率に表れるこのような異常な傾向は一般には、我が国の教育訓練制度が、知育中心の学校教育におかれ、社会全般に、知識偏重、学歴万能の風潮が根強く存在しているためといわれているが、中卒者の進路決定に当って、担当教師の考え方や父兄の考え方がその背景にあるとみられないだろうか。

今回私が訪問した4つの中学からその背景を探ってみた。

1. A 中学で

A 中学では職業指導主事と学級担任の 2 人の先生に面接した。

市街地からやゝはずれた A 中学の位置する K 府の周辺地域では近年、都会地にみられるドーナツ化現象が進行して急激な人口増を生じ、それにつれて、中学入学者の数が激増した。そして A 中学では 44 年度卒業生は 556 名に達した。

このうち就職者は 40 名程度ということで進学者は 92 % に近い高率である。

進学者の年次別推移は下表の通りで、進学中心校であることがわかる。

公立高校入学状況（卒業生男女別総数当り）

年度	性別	卒業生	普通科程	%	職業科程	%
40	男	271人	79人	29	55人	20.3
	女	263	48	18	28	10.6
41	男	233	63	27	45	19.3
	女	263	46	17.5	36	13.7
42	男	234	72	30.7	57	24.3
	女	247	49	19.8	50	20.2
43	男	271	75	27.7	46	16.9
	女	253	54	21.3	29	11.4
44	男	260	96	37	38	14.6
	女	296	74	25	42	14.2

私立学校入学状況（卒業生男女別総数当り）

年度	性別	卒業生	入学者数	%
40	男	271人	68人	25
	女	263	123	46.8
41	男	233	78	33.4
	女	263	119	45.2
42	男	234	68	29
	女	247	111	45
43	男	271	112	41.4
	女	253	116	45.8
44	男	260	96	36.9
	女	296	143	48.3

また進学者の内訳をみると下表のとおりで

学校別	性別	普通科程	職業科程	計
公立	男	85	16	133
	女	79	72	117
		164	88	250
私立	男	96	37	101
	女	74	43	151
		170	80	252

国立高専	3
定時制	7
各種学校	4
就職	40

普通科と職業科との比率は2：1の割で普通科が多い。また男女別の比は、男では10：3女では10：7の割で女子に比較的職業科志望が多い。

さらに、進学希望者のうち、合格者と不合格者の割合を公立高校についてみると、下表のとおりで、職業科では普通科に比べて50点以下の下位成績でも、合格率が高くなっている。

さらに私立高校では受験者総数の9割までが合格していることなどから下位成績でも充分進学可能な道が残されており、高校進学率が高いとはいえ、かなり質の点では問題が残るといえそうである。

指導主事が下さった進路の手引の一頁を開くと、進学を希望する人への心得として、自分は勉強ざらいだが家人がすすめるからとか、社会に出た場合、高卒の方が何かにつけて有利だし、待遇もよいからといったような漠然とした気持だったら進学はやめなさいと記されてあった。

進路決定は、12月に進路調査と称して、クレ職適、学力、知能等の検査を行い、この成績をもとに概略の方向付けを行って、1月に進学組を決定するということがあったが、進路指導が形式だけの適性検査で終ったり、適切に運用されなかったりするきらいがないとはいえないように感じられた。

2. D中学で

D中学に伺う前、まずこの中学は父兄の多くが、川漁や失対人夫などの拾い仕事をしていて一体に貧しい子弟が多いと聞かされていたが、学校は牧歌的田園風景を見下ろす小高い丘の上に立っており、外見は立派な建物だった。面接して下さった教師は同行したI係長とは顔なじみということもあってか、かなり訓練校に理解をもっており、生徒を引卒してよく訓練校に見えるということだった。

また訓練校を志望する人達には、生徒の志望職種をかなえさせるために数学の補習教育を行ったり、研修会等では進学粗と同じに取り扱うなど、いろいろな面で努力を傾けて下さっておられる。

こういつた先生の熱意を反映してか、一旦は生徒の中に訓練校を志望する人が多く出るということだったが、結局は親の反対に合って方向替えをするということで、いかにも残念そうに語っておられた。

父兄の大多数は、たとえ子供が出来なくても、経済力の許すかぎり資格のもらえる私立高校へ入れさせたいという考え方をとっており、これはどうにもならないということである。

そして訓練校を受験する人の中には、親のそういった迷いを反映してか併願が多いという。

3. C中学で

C中学は訓練校とは地続きの手のとどくようなところにある。当然この校長は訓練校の校長とは顔なじみであったし、訓練校への行事にも出向いて理解を示しているように見えたのであったが教頭の考えはそれとは裏はらであった。その教頭によれば訓練校は実技を専門に教えるところ、学校は学科を教えるところと割り切っていた。

さらに理論を教えることで知識はより早く習得出来るという考えを強くもっており、訓練大に対しては技能本位の大学であると理解していた。

そして4年制大学で理論と実技の両方は完成出来ないと思得を切っていた。

訓練校志望者を無業組に入れているあたりどうやらこの中学は進学重点

校であるらしいとみて、進路指導に対する姿勢を問うたのに対して困惑した態で遂にいい得なかった。

進学者の年次別推移は下表のとおりで進学組の多くは公立高校に進んでいるが、しかしこのうちの約2/3は職業科に入っている。

商業地でもあり、また重工業地帯をひかえたO県の特徴ともみられるが、見方を変えれば志望者の落ちこぼれが少なくなったことを意味し、高校の質の低下の表われとみることも出来る。

年 度	卒業生	進学者	就 職	定時制	無 業
43	210	192	7	3	1
44	183	164	11	1	7
45	246	223	11	4	8

年 度	公立高	普通科程	私立高	普通科程	国立高専
43	155	56	34	34	2
44	113	54	45	45	4
45	150	55	66	64	6

Ⅲ. 訓練生資質について

本年度入校高訓生の中卒時の成績と行動記録を指導要録によって調べた。

地 区	中 学	訓練生	科 目	I Q	学 科			
					国	数	理	技・家
K 府	A	A 15才	機 械	90	2	1	2	2
		B "	自動車	121	3	3	3	2
	C	C	機 械	105	2	3	3	3
		D	板 金	31	1	1	1	1
O 県	C	E	自動車	67	3	3	2	3
		F	"	59	2	2	2	2
	D	G	機 械	89	1	1	2	3
		H	溶 接	109	2	2	2	2
		I	機 械	106	2	2	3	2
		J	板 金	68	1	1	2	3

これをみるとIQ100以上の者が約6割いる。そして、全数の約3割は普通の成績であり、進学可能な者達である。

そしてこの中にはB君、E君のようにIQが高い者もあり彼等は努力次第で恐らく公立普通校にも入れたであろう。さらにF君、H君、I君のようにIQが100を越しながら学力の出ない者もいる。

このようにみると、彼等の多くはIQの割に学力が出ていないということであり、一体に彼等は勉強をしていないようだ。彼等のうち、B君、C君、H君の場合は、一度は公立高を受験したが、失敗したのでやむを得ず訓練校に入ったとみられる例である。

この場合高訓入校後の適応状況が問題となる。高訓における学力評価から彼等の成績を拾ってみる

高訓	科名	訓練生数	訓練生	実技	学科	備考
P	機 械	9人	A	7位 (100)	8位 (57)	120点
			C	5位 (103)	4位 (70)	満点
	自動車 自動車	7人 9人	B	6位 (97)	6位 (56)	100点 満点
			E	4位 (89)	5位 (58)	
Q	板 金	21人	F	8位 (65)	9位 (48)	満点
			D	18位 (64)	16位	
	機 械 溶 接	13人 1人	J	3位 (88)	9位 (62)	
			G	8位 (75)	6位 (60)	
			I	4位 (84)	7位 (56)	
			H	2位 (86)	3位 (73)	

H君とC君は成績が向上し、実技学科ともますますの成績である。ところがB君は、IQが121で高訓の中ではかなり上知であるが意外と成績が振わず、クラス7人中6位で適応のわるいことがみられる。訓練生担任の所見でわ、彼は意欲的であるが粗野で目立つことをするなど彼の内面に暗いものを感じられる。

母親の死亡も原因につながるのではないか。B君と対照的によく適応したとみられるH君の場合は、父親が死亡して母親が役場に勤める母1人、子1人の家庭である。真面目で応用力に富み、云われたことをきちんとやるなど、しっかりとした態度を感じられる。

次に自分から希望して訓練校に入ったA君、E君、F君、J君についてみる。E君はIQが高い割に中卒時の成績が振わなかったが、入校後もIQに

ふさわしい成績をあげていない。学科の面でどうしても劣る。しかし実技では成績が上位なのでこの方面の素質があるとみられる。担任の所見でも根気がよい、真面目で努力するなど評価はよい。

E君と対照的にIQでは低かったJ君は入校後成績が向上し、努力の後が顕著である。特に実技では89点を取得して、クラス21名中3位をとるなど技能面ですぐれた素質が感じられる。

消極的、目立たないなど内気な性格であるが真面目で云われたことをこつこつやるなど、技能者の平均的なタイプである。彼とは反対にG君、F君の場合は適応のわるい例であろうと思われる。特にF君の場合はIQがよい割に実技学科ともクラスの最下位であるなど勉学態度が至極わるいことが考えられる。

やはり担任の所見でも根気が足りない、勝手な行動をするなど無気力で反発的である。兄2人は同じく高訓を出ており、父親の家業をつぐことになっているようであるが、彼の場合は目的もなくずるずると入った気安さが感じられることと、末っ子の三男坊で自覚に乏しいことも考えられる。以上高訓の素質と適応についてみてきたが、適応例と不適応例からあらましの原因を探してみると三つの原因が考えられる。すなわち、

- 入校時の動機
- 適性と能力
- 家庭環境と経済力

はじめの入校時の動機はIQ値に関連が深いものであり、IQの高い割に学力がのびていないものは問題が残る。90～110位が適当だといえそうであること。この範囲を越すと進学可能であり、多くは受験失敗組が偏り、仕方なく総訓をみざすことになるので、彼等の指導には十分な配慮が必要とされる。

次に適性と能力は同じ尺度で計ってはならないということ。先のJ君の例のようにIQが68でも実技の面でのびているものや、F君のようにその逆のものがあるなど前者は適性があり、後者は能力はあるが適性がなかったよい例であるといえる。

さらに環境では、親・兄弟や父の職業などが関係していることである。B君は経済的には裕福であったが母親が死亡して彼の性格を歪めたことが考え

られないこともない。しかしH君は父親が死亡しているが、母1人、子1人で母の苦勞をよくみているので却ってしっかりした人間に育ったのではないかと考えられる。それから、F君、G君は2人とも3男で、父親が職人であるなど似たような境遇に育ち、経済的にも恵まれていながらいずれも悪くなっている。適応のよいJ君、E君、H君がいずれも長男であったことと併せて、次男、3男はとかく自覚に欠けることが考えられよう。

IV. 企業の求める訓練生とは

訓練生が企業に就職してどのようなうけ方をされているかということは訓練を担当するものの最大関心事であろうと思われるが、この点について、P高訓のH課長から伺ったお話では中卒の直接就職者の多くは定着率がわるく、転々と職を変える者が多い中に、訓練校の卒業生は定着がいいため、企業のうけがいいらしいと云っておられた。そしてその理由として、直接就職者は、やれ金の卵だ、月の石だとおだてられて、とに角就職するが、やがて自分の能力に自信がもてなくなったり、同僚や、先輩達に対して肩身が狭く居ずらくなるのだろうという。

しかしこの見方はQ高訓では違っていた。校長によれば、最近では訓練校に要望する企業側の注文は、躰のよいものを第一にあげており、技能が重視されていないとなげく。そして卒業生の就職先をみても訓練職種とは関係のない職場につく例が多く離職するケースが多いということだった。

そこで最近では自衛隊出身者やねばりのきく農高出身者などが重用されているということも聞いていと云っておられた。

V. 訓練校の魅力づくりについて

1. Q高訓にて

私が訓練校を訪ねた時期は丁度訓練生の募集期に当たっていて、幹部は中学にあいさつ回りに出ることが多かったが私と同行したH課長も近く行なわれる行事への参加を呼びかけていた。校長によれば、日頃のこうした呼びかけが意外と効を奏して高訓を思い出してくれるようであると云っておられた。

その行事とは校内を解放して例えば中古車の修理をするとか、家庭電気製品、はては手すり等の補修などを行なって住民へのサービスをするというものであるが、結構住民が利用してくれるので欠かせない行事の一つであるということである。しかし、校長の云われるには、このような行事は一時的なつながりをもつだけで父兄の意しきをつなぎとめるところまではいっていないようで、やはり実質的な高校の資格取得などに持っていくようにすべきだと力説しておられた。そしてさらに、訓練所が訓練校に校名変更をして以来、訓練生はコンプレックスをもたなくなったことから、訓練校は〇〇学校などの名称に変更すべきだとも云われた。

VI. 高卒訓練をふり返ってみて

1. P高訓にて

P高訓では先に述べたように、45年から発足した金型科を含めて以前より高卒訓練を行なっているため、標記のテーマで座談会をもった。

座談会には各科の指導員方に出て頂いたが、この中には金型や電工科のような混成訓練を行なっているところ、電子科のように高卒者対象の訓練を行なっているところ、機械、自動車科のように中卒専門の訓練を行なっているところなど多種であるため、貴重なお話を伺うことが出来た。

： 高卒者の入所動機について

彼等は入所の時点ではっきりした目標がない。上級学校にもいけず、かといって腕がないので、いい就職口がみつからない。そんなところから門をたたくようである。

： 高卒者の質について

電子は大体においてすぐれるが、他は一体に落ちる。それに意慾が低い。

： 中卒と比較してどうか

1年次では学科において高卒者がややすぐれるが実技では変らない。しかし2年次になると中卒が逆に高卒を追い抜くようになる。

： 高卒が中卒をリードしないか

そうではない。2年次では中卒者が高卒者をリードするようになってむ

しろ高卒はうかうか出来ないといった気持になる。

： 彼等をどのように指導しているか

彼等は自己主張が強く規則を素直に認めようとしない。そこで納得づくの上でやらせるようにしている。

： 高卒者に中途退学が多いが

中卒に追い抜かれて居ずらくなるのではないか。

しかし電工科などは1年で資格がとれるので1年でやめる者が出る。

しかし、一方授業がばかくさくなり欠落する者もいるという話も聞いた。

： 高卒訓練の今後について

高卒2年、中卒3年の別コースがよい。

高卒1年、中卒2年の別コースがよい。

校長の見解では、高卒訓練は業界の要望もあり、貴重な給源なので、今後は高卒訓練に順次重点を移していく方針であると語り、そのためにも高卒訓練生が訓大へ編入できる道をつけるべきだと強調された。